



TITLE:

<書評リプライ>書評へのリプライ -
-人と土地、国家と社会

AUTHOR(S):

佐久間, 寛

CITATION:

佐久間, 寛. <書評リプライ>書評へのリプライ --人と土地、国家と社会.
コンタクト・ゾーン 2015, 7(2014): 275-277

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209797>

RIGHT:

書評へのリプライ ——人と土地、国家と社会

佐久間寛

はじめに、書評を執筆してくださった杉村氏にふかく感謝を申し上げたい。自らの書き物をこれほど丹念に読んでもらえる研究者は、けっして多くはないはずである。また氏には、的確な論旨のまとめにもとづき本書の問題を2点あげていただいた。いずれも批判的・否定的な意見というよりは、さらなる可能性を本書から引き出す助言的・肯定的な指摘として受け止めた。以下では、今後の研究の展望にふれながら、各指摘に応えていきたい。

①人と土地——灌漑農地化がもたらす社会経済的意味という課題

本書の舞台であるニジェール西部は、従来天水農業が営まれてきた地域である。こうした地域に灌漑農業が導入されると、「所有される土地の質・価値・意味」は大きく変容する。ところが本書では、「社会組織・国家による管理」の特質が論じられている反面、「灌漑化された「農地」の有する社会経済的な意味」の考察が十分になされていない。以上がわたしなりの理解による杉村氏の指摘である。

正鵠を得た指摘である。本書でとくに重点的に考察したのは、灌漑農地そのものではなく、この農地とともに国家が導入した協同組合という組織である。突き詰めていうと、協同組合代表という「土地を没収する者（受けとる者）」と彼らから「土地を没収される者（受けとられる者）」との社会関係の分析、つまりは「土地を介した人と人の関係」がここでの主要な関心事であった。その一方で、人と関係する当の土地の質や価値や意味という論点、いわば「土地と人の関係」という論点は、たしかに十分には扱い得なかった。

もっともこれには理由がなかったわけではない。本書は行政村ガーロコイレの分裂を主題とする民族誌であるが、この主題を論じるにあたって優先すべき課題は、あくまで社会的葛藤の源である土地を介した人と人の関係であった。この課題をめぐる研究に一区切りをつけたからこそ、今後は灌漑農地の整備によって土地と人の関係にいかなる変化がもたらされたかという課題に取り組みたいと考えている。

ところで杉村氏の書評には、この課題へ取り組むための示唆となる視点が記されていた。

275

すなわち、灌漑農地整備という開発事業を「天水を前提としたアフリカの農地の中に、突如として土地の資源価値の極めて高い水田灌漑というアジア的世界が生み出され」る現象と捉える視点である。一般に人類学を専門とする者は、当事者のミクロな視点を重視するあまり、その当事者を取り巻く環境世界を他の世界と比較するマクロな視点を欠落させがちである。それだけに「天水を前提としたアフリカの農地」と「水田灌漑というアジア的世界」を大胆に対置する視点は新鮮だった。アフリカ小農世界の固有性に着目するゴラン・ハイデンの議論を再評価し、モラル・エコノミー論的な比較研究〔cf. 杉村 2007〕を継続されている杉村氏ならではの見識と拝察されるが、灌漑農地の整備が土地と人の関係にいかなる変化をもたらしたかという点を考察するにあたっては、こうしたマクロとミクロを架橋する複眼的視座が不可欠になると予想される¹。そこでは、たとえば「所有される土地の質・価値・意味」という場合の「所有」とは、誰にとつての何であり何でないのか、という根源的な問いに踏みこむ必要がでてくるからだ²。今後の研究を通じて氏の問題提起に応えていきたい。

②国家と社会——アフリカ国家論という課題

第2に杉村氏からは、導入部で論じられた「国家と社会の葛藤」の基層にあるアフリカ国家をめぐる問題についての考察が十分に深められていないという指摘をいただいた。これも的確な指摘である。「国家と社会の葛藤」を論じるうえで本書が焦点をあてたのは、辺境の一行政村分裂という出来事である。一見些末なこの出来事に迫ることにより、一方では、その背後にある歴史的なプロセス、すなわちフランスによる植民地化から独立後の灌漑農地の開発事業をへて冷戦崩壊後の現代にいたる国家と社会の動態を描き、他方では、このプロセスの末端に位置する個体（実地調査中のわたし）に映り込んだ「他者に負うことなく土地を奪う絶対的他者」という国家表象を描き出すことを試みた。しかしながら本書には、この試みが成功したとして、そのことにより何がどう明らかになるか、という点についての展望が欠けていた。たとえば、古くは *African Political Systems* [Fortes & Evans-Pritchard 1940] にまでさかのぼるアフリカ国家論への人類学的アプローチという課題は、十分に展開されていないというのが実情である。

この点をめぐり今後の研究においてはまず、本書ではもっぱら国家なる言辞の下で抽象的に捉えられているに過ぎない領域を、ニジェールという一共和国の個別具体的な問題として把握し直す作業をすすめていかなければならないと考えている³。本書でも若干触れているように、独立後ニジェールの転換点となったのは、ウランという鉱物資源の採掘が本格化したことである。それによって得られた資金が環流するかたちで推し進められたの

1 そうした視座を拓く作業の第一歩として、別稿では、ニジェール西部における灌漑農業の導入を中尾佐助の農耕文化複合論から解釈することを試みた〔佐久間 2014〕。

2 この問題を考えていく上で、最近まで翻訳作業を進めていたカール・ポランニーの著作からは少なからぬ刺激を受けた。その議論によるなら、土地とは、所有の対象となる「商品」や「生産手段」などといった人的関係の函数である以前に、人をとりまく環境そのもの——「自然の別名」——にほかならず、それゆえ人と土地の関係を問い直すことは人と自然の関係そのものを問い直す作業にほかならないのである〔ポランニー 2015〕。

3 この点をめぐっては佐久間〔2015〕で部分的に論じた。

が西部ニジェール川流域における灌漑農業化プロジェクトだったわけであるが、これにたいして資源採掘地でありながら開発から取り残されてきた地域があった。アガデズ州をはじめとする北部である。結果、西部で灌漑農地をめぐる叛乱の情動が一行政村を分裂にいたらしめていたちょうどその頃、北部では貧窮する青年層を中核に形成された武装勢力の叛乱——いわゆるトゥアレグ問題——が勃発していた。行政村ガーロコイレの分裂という出来事に現れた国家と社会の葛藤は、こうしたマクロな構図を踏まえることでより明確に理解できるのではないかと予測している。

＊

以上が2点の指摘への回答である。最後に、本書の最終章に記した「ごく」という言葉の解釈に眼をとめていただいた点にふれておきたい。本書のなかでわたしは、この副詞の連なりを「呪詛」と表現した。そう記した時点ではかならずしも自覚していたわけではなかったが、それはあながち比喩的な誇張とも言い切れない表現だった。学術書としての体裁を保てるか否かの瀬戸際に追いこまれるとしても、自らの言葉で説明せぬわけにはいかなかった言葉、そうせぬことにはフィールドワークに決着を付けることもできなかった言葉こそが、あの「ごく」だったからである。この言葉をめぐる解釈を「叛乱とモラルを結ぶ民族誌の一つの到達点」と評していただけたことは望外の喜びであった。自身が囚われつつけてきた呪縛から解かれたようにさえ感じている。あらためて氏に感謝申し上げ、小文の締めくくりとしたい。

277

＜参考文献＞

- 佐久間寛 2014 「スーダン農耕文化複合の現在——ニジェール西部ソンガイ系社会の事例から」『生態人類学ニュースレター』19：24-30。
- 2015 「落花生からウランへ——ニジェールの一次産品経済の構造と変容」『明大商学論叢』97(3)：159-178。
- 杉村和彦 2007 「序章——今日的課題をめぐって（特集：アフリカ・モラル・エコノミーの現代的視角）」『アフリカ研究』70：27-34。
- ポランニー、カール 2015『経済と自由——文明の転換』福田邦夫・池田昭光・東風谷太一・佐久間寛訳、筑摩書房。

Fortes, Meyer & Edward E. Evans-Pritchard 1940 *African Political Systems*, London: Oxford University Press.